

【ポスターセッション】

関係離脱後のDV被害者が新しい生活を築いていくプロセス**—M-GTAによる当事者インタビューの分析—**

○ 大阪府立大学大学院人間社会学研究科 増井香名子 (会員番号 7166)

山中京子 (大阪府立大学・4129)、児島亜紀子 (大阪府立大学・2765)、岩本華子 (奈良教育大学・6144)

キーワード：DV被害者 離脱後の生活・M-GTA

1. 研究目的

本研究の目的は、DV被害者が暴力のある生活を離れた後、いかにして新しい生活を築いていくのかについて、加害者との関係を離脱したDV被害者の経験からそのプロセスを明らかにすることである。

DV被害者に関わる先行研究の多くは、受けてきた暴力の実態、DVが被害者に及ぼす影響、その暴力から逃れることの難しさ、反復性複雑性トラウマを伴うことなどによる回復の多難さなど困難な側面を明らかにしている。また、一旦離れた後に加害者のもとに戻る被害者がいることも知られている。一方で、暴力関係から離脱し、暴力のない生活を獲得し新しい生活を築いている被害者も多く存在する。DV被害者が暴力関係から離脱するプロセスにおいて、被害者は「決定的底打ち実感」によって離別の決意(増井 2011)をし、さらに「パワー転回行動」により比較的短期間のうちに、暴力のある生活から暴力のない生活に自らの状況を変化させていた(増井 2012)。

本報告においては、「パワー転回行動」により暴力関係を離脱後のおおよそ数年間の経験に焦点づけて報告する。被害者がとりあえずの「生活の場を確保」した後、どのように新しい生活を作り、加害者の元に戻らない生活を維持していったか、被害者は新たな生活を作るなかでどのような内的な変化や他者との関係を経験しているのかなどについて、当事者の語りをもとに分析する。さらに、その結果からDV関係から離脱後の被害者の支援のあり方について考察する。

2. 研究の視点および方法

DV関係から既に離脱している人を対象に半構造化インタビューを実施した。平成19年12月から平成24年3月までの間に得た26名のインタビューデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は大阪府立大学人間社会学研究科において研究倫理審査を受け承認を得た。調査協力者には事前に調査について口頭および文書にて十分に説明を行い、調査協力への同意を得た。個人情報はずべて匿名化し調査結果の公表過程において個人が特定されないことがないように配慮し、調査協力によって協力者の安全が脅かされないことがないように最大限の注意を行った。

4. 研究結果

生成した<カテゴリー>と『概念』を用いて、ストーリーラインを以下に示す。

被害者にとってDV関係から離脱することはすぐさま苦難から解放されることではなく、『つながりを喪失する』、『先がみえない』、『残った関係が重い』という<喪失し、重荷をおう>ことである。しかし、被害者はDV関係の離脱に『踏み出した自分自身に支えられる』なかで、『日々の小さな幸せを感得していく』ことにより、『もうあの生活には戻れない』と感じ、<暴力のない生活は何ごとにも代えがたい>という実感覚を抱く。その実感覚を支えに、被害者は喪失から『一つ一つをそろえていく』ことで<日々の生活を作る>。これと並行して、被害者は『権利を戦う』ことや『極力戦わない』ことを都度選択しながら、<関係を切るために動く>。

しかし、<日々の生活を作る>ことや<関係を切るために動く>なかで、被害者は多くの『理不尽に出会う』。さらに内的に湧き上がる罪責感や自己無力感などのDVの後遺症ともいえる『呪縛に苦しむ』。そして、自分自身の選択が『時にぶれそうになる』。離脱後のさまざまな<痛みにえぐられる>生活は『とにかくしんどい・とにかく大変』である。

それでも、被害者は『しのぎこらえる』とともに『何とか対処する』なかで<日々を超え抜く>。そして、<日々の生活を作る>ことと<関係を切るために動く>ことを実質的に支援する他者からの『助けを得る』とともに、『〇〇がいるからがんばれる』と感じられる<つながりに救われる>。さらに、これまで蓋をしてきた『感情が噴出する』経験や自分自身の状況の『からくり気付いていく』経験、『ぶれない』自分自身を自認するなかで少しずつ<呪縛がとけていく>。

これらのプロセスは一方向に進むものではなく、行きつ戻りつの中か螺旋状に変化していく。少しずつ時間を経て、『日常生活ができていく』こと、『一人じゃないと感じられる』こと、『関係の区切りがつく』ことにより、被害者の<新しい生活が日常になっていく>。

被害者は暴力関係から離脱後生きるなかで『自分の空虚を知る』が、『自分という心で自分を生きる』ことを試み、<自己の歩み>を進めていく。

DV被害者が新しい生活を築いていくプロセスは、少しずつ大丈夫が増えていくプロセスといえる。

5. 考察

被害者がDV関係から離脱後新しい生活を築いていくプロセスは、脆弱さを抱えつつ、暴力のない生活は何ごとにも代えがたいという実感覚に支えられ、脆弱さと拮抗しながら、日々を必死に生きる中で大丈夫が増えていくプロセスであるといえる。

日常生活ができていくこと、一人じゃないと感じられること、関係の区切りがつくことがこの時期の大きなテーマとなる。つながりの喪失を経験した被害者は、結果的につながりにより大丈夫が増えていく。そのため、この時期支援者は日々を超え抜く被害者につながり、新たな生活が日常のものとして営めるように支援することが求められる。